

# 「バーの扉」(ファンタジー・バージョン)

—旧友との再会・港区編・前編(1980～時代の変革の始まり)—

札幌市医師会  
華岡青洲記念病院

はなわか けいいち  
華岡 慶一

先日、ネットワークが生み出す不思議なきっかけ(望む未来からのメッセージ?)で\*、高校時代を同じクラスで過ごした友人Y——「頭の使い方」が優れていると感じた数少ない同級生——と食事をした。Yは、最難関大学経済学部(浜田宏一ゼミ)で金融工学・ゲーム理論を学び——自分は霞ヶ関には向かないと見切りをつけ(法学部卒官僚は貧乏根性エリートとこき下ろし)——当時の最人気就職先(丸の内に本社を構える商社)の内定(200人の超エリート)を得た秀才だ。さらに、複数の都市銀行の内定を断る際に、人事担当者が悔し紛れに放った言葉「商社は、最初の配属先にほぼ一生固定(Yはそれを『イカ』『タコ』『墓石』と表現した)されますが、銀行は各部門を経験できますよ」を受けて入社前から念じて、財務部を替運用部門配属を得た男だ——200人中そんな特別は、ほんの数人だった(入社式直後の所属部署発表で絶望的な表情の多くの同期の顔を目にした)。しかしYは(驚くべきことに)せっかく就職したその超有名企業をわずか4年足らずで退職し、N投信へ転職した——以後43歳までに実に11回転職した(国内、欧州や米国の生保、証券、信託のファンドマネージャーとして)。詳細はYが45歳の時に著した本に詳しい(今は絶版になっている)。Yは「不合理」に寛容ではない(自身の「非合理」には特に厳しい)。それは大企業(国内外の)といえども例外ではない。彼は、常に社内同調(思考停止・劣化)の圧力に屈しなかった。Yに言わせると転職は、究極「ある種の快感をもたらす」ものらしい。

それは、YouTubeで見つけたYの登場するコンテンツ——ホリエモンとの対談で共著も紹介していた——での発言に共感して\*、「私的な案件」に関する経済上の意見を求めて食事に誘ったものだ。

以前、飛び込みで入ってもボラなかった「龍土町」の店で『ポランジェ』の供に、すぐ出る「カラスミ」(ボラ)と「あぶらあげ」で始めて、初めはブラウン運動の数量モデル「ブラック＝ショールズ方程式」(デリバティブ・オプション価格に関する確率偏微分方程式)の「ポラティリティー・ $\sigma$ 」の「正規分布仮定の弱点」克服に益する「確率的ポラティリティー・モデル」について意見を求めた。それから「鱧落とし・南高梅」や「新子」(4枚だった)と「づけ」数巻で腹を拵えて、本日の「核心問題」に関する意見を拝聴した。予想通りの返答を得て、私はそれを確信した。別の話題「グラフ理論の入試史上最難問は前年の映画がモチーフ仮説」へ移り、「肴」も「越前塩の開きのどぐろ」を所望し、海と土に合わせて『梵』

を当てた。

世間は第7波の上昇局面(相転移)にあったが、私は「\*\*ウイルス」に関して最強免疫を獲得していた(はずだ)。さらに私の免疫力は「波長の合わない人間」に対しても有効と期待していた。

……実は店に入った時、ひと席開けた左隣には、和装の男(キツネ目の)が座っていた。右手に金無垢のロレックスと数珠という身なりで、「仲居」にクレームをつけていた。「やれやれ……」。Yと一緒にいる時はほぼ確実にこの手のキャラを引き寄せる(存在に気がつく)気がする。

かつて思い当たった理由(原因)は、我々の会話に反応する人たちの存在だ。それは話が共鳴し、倍音を発していると感じた時に起きる。

例えるなら、キツネ目が「酸っぱい葡萄」と言っている目の前で、その「ブドウ房」を驚づかみに頬張り「う(あ)っまー!」とタヌキ目の二人が叫んでいる状況だ。意識構造を独断分析して表現すれば「承認欲求の奴隷」が「認知的不協和の解消」のために「未来精神の安定へのリスクヘッジ」をしているのに、我々の会話が彼等の筋立て(論理構造)を刺激して(妨害して)「苛立ち」を誘発するのだ。私は、Yほど強く「正義」にこだわっていた訳ではないが、彼の生き様は好きで(心地よくて)敢えて煽るように仕向けていた節はあった(かもしれない)。

最近、そんな人物に出会っても(気がついて)も上手く意識から除外する(盲目を向ける)ことを覚えた。その男は「のどぐろ・アカムツ」について「江戸前ではない(当たり前前だ)とか「匂について」(最近は通年活ける)を料理長に(プロに)講釈していた。その男の話に“deaf ear”を向けて(意識から遮断して)料理と酒のマリアージュを堪能した。Yは、高校時代からの酒豪だが——これが後の事件の一因となる——質にこだわる成長も遂げていた。かつてYのレトリックに感じた「毒」は——都会的洗練を得て、一見隠蔽されていたが——痛い真実を抉る鋭い感性の刃先は(私には)隠しようもない。

Yとの軽妙でありながら本質の闇を覗く会話は突然、隣の男の発する「インド人仲居」への叱責の罵声とそれを取りなす「若女将」への賞賛の嬌声で中断された。それは“deaf ear”の遮断レベルを越えていた。絶対的な実行資本を持たない(しばしば負である)この手の輩にとって、相対的な価値・利益創造(軸を跨ぐどころか、負の象限での差を装う)目的の「捏上げ手法」は常套手段だ。それは「教祖が信者洗脳目的に悪用する認知バイアス“Anchoring”」と通じる。とまれ「その手は食わぬ」と、左耳を完全にシャットダウンした。「手打ちそば」でその状況と手打ちして、“dessert and abort”作戦を実行した。その後、無事(?)キツネ目の教祖を置き去りにして、「筈町」さらに「霞町」の「バーの扉」(ファンタジー・ワンダーランドの扉)を開ける「冒険物語」が始まるのだが、続きは後編で。